

葛布の できるまで



① 6月～9月にかけて、その年に出た新しい葛のつるを採る。



② 採集したつるを釜で煮て、流水につける。



③ 冷めてから、むろ(土を掘って生草を引いた処)の中に入れ、その上に生草をかぶせ、さらにムシロでおおい、2日間ほど自然発酵させる。



④ 腐った表皮を流水で洗い流して芯を抜き、芯と表皮の間にある粉皮(葛の繊維になるところ)を集める。



⑤ 約100本ほどを集めて、仕上げ洗いをして、乾かすと葛芋(くすお)という葛布の原料が完成する。



⑥ 細かく裂いてつなぎ管に千鳥に巻きつけ、葛つくりを作る。



⑦ その葛つくりを使って織上げると、葛布ができあがる。

掛川特産手織葛布織元
商標登録第一四三三六七一号

創業明治三年

①こたけや

川出幸吉商店

〒433-0075 静岡県掛川市仁藤町七番地の三
電話 〇五三七・二四・二〇二一
ファックス 〇五三七・二二・一六八五



川出幸吉商店へのご案内

当店は、城下町風の新しい街並みの中心地にあります。
掛川産の葛を用いて制作した、さまざまな記念品やお土産、ご贈答品などを展示販売しております。また、店内で葛織りを体験していただくこともできます。駐車場も完備しておりますので、どうぞお気軽にお立ち寄りください。

掛川特産

葛布

全日本推奨土産品審査会推薦品
第四回全国伝統的工芸品展・通産省生活産業局長賞受賞
平成一年度・伝統的工芸品産業功労者褒賞受賞

①こたけや
川出幸吉商店





これもこのところ習いと

門毎に 葛てふ布を

掛川の里

藤原為相

葛(くず)

秋の七草のひとつに数えられる葛は、この地方の野山の至るところで蔓(つる)をなして自生しています。根から葉、花までのほとんどが役に立ち、むだに捨てる部分がない草科の植物です。このつるから採取した繊維を緯糸(よこいと)として織ったものが葛布(くずふ)かづぶと呼ばれます。



第四回全国伝統的工芸品展(昭和55年)
通商産業省生活産業局長賞受賞
「針さき葛布甚平」



当店が看板に掲げる「葛布」の文字は、江戸中期を代表する儒学者・書家として知られる細井広沢(一六五八〜一七二五)によるもの。広沢は掛川藩士の家に生まれ、若くして江戸に出て、学問や書を学び名をなした掛川出身の儒人です。

手織葛布製品のご案内

明治初期、初代川出幸吉の考案した襖地用の葛布が好評を得て本格生産されたところから、当店の歴史が始まりました。以後、今日まで四代にわたり、掛川葛布の老舗として「れん」を守り続けています。おかげをもちまして、これまで明治・大正・昭和・三代の御皇室の御用命の光栄も賜つてまいりました。



床掛・茶掛・色紙掛・短冊掛・三二色紙掛



ハンドバッグ



帯地・草履



座布団・座布団地



テーブルセンター



財布・印籠入・メガネケース・がま口・札入れ

その昔、掛川の山深い滝に打たれて修業をしていた行者が、白く晒された葛の繊維を見つけ、この地の人に葛の繊維を採る方法を教えた。という言い伝えがあるように、遠く鎌倉時代から、掛川ではすでに葛布が織られていました。いにしへの歌人、藤原為相も、掛川の葛布にちなんだ歌を残しています。

葛布は、古くは鞆鞆(けまり)の奴袴(さしきぬ)に使われていました。江戸時代に至るとその用途も多岐にわたり、袴(かみしも)地、乗馬袴地、道中合羽などのほか道中土産としても珍重され、葛布産業は城下町掛川、東海道掛川宿の繁栄とともにますます栄えたといえます。やがて明治維新を境にしぼし、袴地・袴地を主用途としていた葛布は需要が激減したものの、襖地用にその活路を見い

出し、再び掛川の葛布が特産品として有名になりました。また、壁紙の素材として、アメリカ・ヨーロッパへの輸出も盛んに行なわれていました。

ところが昭和三十年代以後、外国産の安価な葛布が出現し、掛川の葛布は大きな打撃を受け、残念ながら多くの葛布業者が転業・廃業を余儀なくされるに至つてしまつたのです。しかし、伝統を絶やすことなく守り、後世に伝えてゆこうという人々の手によつて、今日まで脈々と掛川葛布はつくり続けられてきました。現在、掛川市に葛布屋は、当店を含めて数軒が残るのみとなりましたが、優れた工芸品としての評価が各界で高まり、掛川特産葛布製品として全国のみなさまに愛され、支持されて、新たな隆盛を迎えようとしています。

●デザインは多少変更することがございます。